

タイトル	北海道の小規模自治体における地域文化の創出過程に関する一考察 - 沼田町を事例に -
著者	鈴木, 健太; SUZUKI, Kenta
引用	北海学園大学経済論集, 73(1): 89-101
発行日	2025-07-30

《研究ノート》

北海道の小規模自治体における 地域文化の創出過程に関する一考察

— 沼田町を事例に —

鈴木 健 太

はじめに — 研究目的と方法

いわゆる「失われた30年」といわれる日本経済の状況と成熟社会化を背景に、地方では、祭り・祭礼・祝祭、フェスティバル、イベント、アート・芸術、景観づくり、伝統・伝承文化の発信、公民館や各種文化施設における住民の文化活動など、総じて地域文化¹⁾を活用した取り組みが盛んにおこなわれている。いわば、「モノの豊かさから心の豊かさへ」といった社会現象である。

様々な地域資源を活用するまちづくり、まちおこし、地域づくり、地域おこし、地域活性化、といった諸概念の具体的な定義は各々あるが、「なぜ、その地域社会（具体的には地域住民）が、地域社会に賑わいを取り戻そうとしようとするに至ったのか」という歴史的過程に着目し研究することは、上記いずれの概念にも通奏低音的な基礎的作業である。

人口減少をはじめとする縮小社会化していく小規模自治体²⁾において、担い手不足などの課題を抱えながら、現在も地域住民間で継承されている地域文化が、そもそもどのような歴史的過程を通じて創出されたかについて整理・把握することは重要である。とりわけ、北海道のケースで考えてみると、その特異性が際立つ。例えば、伝統・伝承的な地域文化が豊富な本州と比較し、北海道の場合、地域文化は、新たに創出されたものが多い、と考えられる。なぜなら、北海道における地域社会の形成過程自体が、明治以降、官治主導の入植・開拓によるものだからである。

したがって、本稿の目的は、このような地域社会の歴史的発展において特異性をもつ、北海道の小規模自治体における地域文化の創出過程を分析し、明らかにすることである。

研究方法については、文献・資料調査を中心とした。また、予備的ではあるが、調査対象地域のフィールドワークをおこなった。

なお、本稿は、実態調査に基づく研究の前段階（基礎的作業）として位置づけるものである。

1. 北海道における地域社会の特異性と地域文化

ここでは、北海道の地域社会の特異性と地域文化について考えてみたい。

先述したように北海道の地域社会は、官治主導、入植・開拓によるところが大きい。北海道農村（村落）においては、本州にみるような「いえ」や「むら」は存在せず、「農事組合」型集落（村落）として形成・発展してきた（小内2019：1-2）。「農事組合」型集落（村落）を提起し

たのは、田畑保である。北海道農村は、府県農村に比べて歴史が浅く、それゆえ農家の相互関係（地縁関係）も府県と相違する（田畑 1986：1）。つまり、行政村として形成された北海道農村においては、府県農村にみるような「むらの自治」がおこなわれていなかった。それを補完するようなかたちで機能した組織が農事実行組合である。農事実行組合は、産業組合の末端組織であり、農家の生産活動を支えると同時に、生活面においても農家相互の地縁関係を形成し、村落組織と重なり合いながら、社会生活全体で深い関わり合いをもたせることに機能した（田畑 1986：48）。田畑は、こうした農事実行組合を単位とする地縁組織を「農事組合」型村落と定義する（田畑 1986：252）。

この系譜で小内純子は、高度成長期以降、生産面・生活面において、農家戸数の減少による集落再編の必要性を整理した（小内 2019：5-7）。さらに、現代では、限界集落化の進展のもと、生活基盤の危機、安心して生活していくことの揺らぎを指摘し、北海道農村社会の前途について警鐘を鳴らしている（小内 2019：8）。このように、現在の北海道の地域社会においては、人口減少・少子高齢化のもとでの農家戸数減少、限界集落化、ひいては限界自治体化が多分に解決すべき課題となっている。

地域文化の維持・存続に関する研究は、こうした北海道の地域社会の特異性を背景におこなわなければならない。さらにいえば、地域文化の維持・存続が地域社会の持続可能性に対し、どのように機能するか、ということこそ重要な研究課題である。

さて、鈴木健太（2024）が提起しているとおり、北海道の地域文化に関する研究は、とりわけ祭り・祭礼・祝祭を「祭礼的なもの」として再定義し、研究することが求められている。したがって、本稿においても地域文化のうち、祭り・祭礼・祝祭を中心に論考を進める。従来の祭り・祭礼・祝祭の研究では、歴史性、伝統性、地域性、実行（執行）に至る様相をモノグラフ的に論じるだけでなく、祭り・祭礼・祝祭を通じて、日常生活上の家と家の関係、町内における社会関係と町内の社会的機能、経済団体や商工会議所、行政などの外部アクターとの関係、これらが祭り・祭礼・祝祭の実行（執行）に影響することを仔細に描き出し、そこに、祭り・祭礼・祝祭のもつ社会的機能やコミュニティ再生の重要性が提示されてきた（松平 1990、竹元 2014、武田 2019）。これらの研究では、様々な社会関係の累積を理論的枠組みのキーワードとし、地域社会関係と地域社会構造の現状・変容・展望を明らかにしている。

しかし、北海道の地域社会においては、その特異性ゆえ、本州の事例や理論的枠組みをそのまま当てはめて研究することは、検討すべき課題である³⁾。例えば、民俗学者である福間裕爾（2004）の事例研究では、NHK 特集『熱走！博多山笠』という番組を視聴した北海道芦別市の住民が、番組内容にひどく感銘を受けた。このことにより、住民有志が芦別市でも山笠の祭りを実施したい、と動き出し、本家（博多）である博多祇園山笠振興会と幾度もやりとりし、実行に関わるノウハウ、祭りの意義・意味などの指導を受け、本家（博多）に「認定」され、現在では、「芦別健夏まつり」で、健夏山笠を曳き回すこととなった。これは、芦別市の代表的な地域文化となっている。ただし、本家（博多）との相違点は、本家（博多）の博多山笠が神事性を伴った伝統的な祭礼であることに相反して、芦別市の場合は、「芦別健夏まつり」に行政が関与しているため、神事性をもたせることが不可能なことである（福間 2004：7-8）。

また、芦別市は、本家（博多）のやり方を徹底に遵守したため、町内ごとに山笠を持つなど、町内会の在り方が変容し、それに伴い地域住民の生活様式にも影響を与えた。

北海道の特異性と関連し特筆すべき点は、芦別市の地域社会形成に関して、芦別市と博多には、

所縁がないことである。こうした独特な文化伝播の在り方を、福間は「電承」と表現する(福間 2004: 7)。また、鈴木健太が提起した「祭礼的なもの」は、神事性を、いったん留保し、祭礼の社会的機能を有するもの、と定義されている(鈴木 2024: 6)。この点から「芦別健夏まつり」を考えると、上述のように、行政との関係上、神事性を含ませることは不可能だが、祭礼の社会的機能は有している、といえる。しかし、単純な「イベント」でもない。こうした点が、北海道における祭り・祭礼・祝祭の特異点である。

北海道への入植者・開拓者が本州の地域文化を北海道でも再現、あるいは伝承させるということは、大いにあり得ることである(鷹田 1986, 宮良 1993)。したがって、北海道の地域社会における地域文化には、入植者・開拓者の母村に起因した事例が数多くあると考える。

以下、本稿では、北海道雨竜郡沼田町における地域文化、具体的には「沼田町夜高あんどん祭り」の創出過程について、分析・考察していく。事例の選定理由は、人口が小規模であるが、祭りの日には、総人口の数十倍の来町者がある、この特異性である。北海道における地域文化のなかでも、これほど特異な事例は他をみない。

2. 北海道雨竜郡沼田町の事例

(1) 沼田町の概要

沼田町は、道北と道央の間、空知管内に位置する町である。旭川市からは自動車です約 50 分、札幌市からは自動車です約 1 時間半の距離にある。

現在の主要産業は、稲作であり、田園風景が広がる農村である一方で、商業施設などの結節機能は、町の中心部に集積している。自然・気候面に関しては、冬には豪雪地帯となる。

国勢調査によれば、2020 年の沼田町の総人口は 2,909 人であり、うち老年人口は 1,240 人で、全体の 42.6% を占めている(総務省統計局 2022)。

地域文化・観光面では、町内の恵比島地区が 1999 年の NHK 連続テレビ小説「すずらん」のロケ地となり、観光地化したことがある。

沼田町は、その地域文化「沼田町夜高あんどん祭り」で有名である。詳細は後述するが、本州から伝来したこの祭りには、開催期間 2 日間で、数万人の観光客が毎年訪れている。「沼田町夜高あんどん祭り」は、北海道三大あんどん祭り⁴⁾のひとつに数えられ、北海道では唯一の「喧嘩あんどん」といわれている。

また、沼田町は、かつて炭鉱業が盛んであったため、2021 年より官主導で推進されている北海道の炭鉱、鉄鋼、港湾をつなぐストーリーと、その観光化を目的とした「炭鉄港」における産業遺産観光地 12 市町の 1 町に含まれた。

(2) 開基の歴史

沼田町は、1894 年に開拓がはじまった。移民が増加した背景には、府県農村の貧困化、本州資本家の北海道における土地経営が盛んとなり、その労働力を府県に求めたことであった(沼田町 1995: 128)。

その前段には、次のような経緯があった。組合華族農場を推進していた北海道庁は、組合華族農場(雨竜農場)を開設したが、中心人物であった三条実美公爵が他界したため、1893 年に組合は解散した(沼田町 1995: 127)。このときの組合華族農場に東本願寺法主の大谷光瑩伯爵

図1 沼田町の地理的位置



出所：Google Map（点線枠内が沼田町）

（大谷家）が参画していた。

現在、沼田町内にある「雨竜本願寺農場」の成立は、この組合華族農場の解散後、大谷家が出資金が少ないため成墾地の配分がなく、独立の農場を組織できなかったことにある。当時、小樽にいた沼田喜三郎は、組合華族農場の解散を聞き、東本願寺に赴いて「雨竜本願寺農場」の設立を説いた（沼田町 1995：129）。東本願寺は、大谷家名義の土地貸し下げを受けることを決め、1893年10月、総面積1,170余坪（3,900ヘクタール）の貸し付けを出願して、翌1894年に許可指令を受け、1901年に全地積の付与を受けた。つまり、沼田町の開墾事業は、沼田喜三郎が設立した開墾会社がおこなったこととなる（沼田町 1995：129）。名称は、開墾委託株式会社雨竜農場であったが、一般的には、通称「雨竜本願寺」と呼ばれていた。同社は、1894年に設立、開拓事業は、翌年から始まった。沼田喜三郎は、富山県西礪波郡から18戸の移住勧誘に成功し、仁多志別（現・北竜第一）に到着した。そして達布、原野地区（現在の沼田第一～第四）、および仁多志別で開墾を踏み出した。こうして1894年が沼田町の開基となったのである。

沼田喜三郎の勧誘に応じて移住した人々の出身地は、富山県（越中）、石川県（加賀）で、1894年に18戸、1895年に団体で180戸、1896年に200余戸が入植した（沼田町 1995：138）。当時は、北竜、沼田、多度志、幌加内地区が雨竜村に属していた。1899年には北竜村が雨竜村から分村した（沼田町 1995：190）。1914年には、北竜村から上北竜村が分村し、この上北竜村が1922年に村名を沼田村に変更した（沼田町 1995：191）。

その後、村から町に昇格すべく、1946年に「沼田町村施行期成会」が結成された（沼田町 1995：201）。期成会の運動もあり、1947年7月1日に沼田村から沼田町に昇格となり、現在の沼田町となった（沼田町 1995：203）。沼田町は、2024年時点で開基130周年を迎える。

ここで、沼田町発展に寄与した重要人物である沼田喜三郎⁵⁾の貢献を記しておく。

沼田喜三郎は、49歳のとき、単身で富山県から北海道に渡り、小樽では1894年に精米業を事業とする会社を立ち上げた。この会社が北海道史上初の株式会社であった（沼田町 1982：277）。沼田喜三郎は、先述したように、華族組合雨竜農場解散の知らせを聞き、小樽の会社を辞し、雨

図2 雨竜本願寺農場が開墾をはじめた区画



出所：道道資料北海道ホームページ

竜原野に乗り込み、開墾委託会社を設立・運営するに至った（沼田町 1995：175-176）。1906年には、留萌線敷設工事がはじまり、沼田喜三郎の計画により市街区画され、沼田市街地は急速に発展した（沼田町 1995：176）。沼田喜三郎は、とりわけ公共事業に尽力し、沼田駅（現在の石狩沼田駅）および線路用地として5,000坪、市街地道路用地として6ヘクタール3アール余、植民道路として5,400坪、そのほか、神社、寺院、学校用地などは、彼の所有地から寄付され、学校校舎や住宅の建築費用にも多額の寄付をおこなっていた（沼田町 1995：176）。

こうした鉄道の敷設、市街地の発展は、沼田町の産業とも密接に関わる。そこで次章では、地域社会構造のうち、沼田町における産業の歴史と地域社会の発展を確認する。

3. 産業と地域社会の発展

(1) 炭鉱業

一方、かつて沼田町の主要産業は、炭鉱業であり、非常に活性化していた。強力な経済基盤としての炭鉱業があるゆえ、鉄道や商店（街）などの社会資本も整えられ、地域社会は賑わっていた。それは、人口推移にもみてとれる（図表1）。ここでは、沼田町史と沼田町炭鉱資料館の資料に基づいて、炭鉱業の盛衰を述べていこう。

1873年に米人技師ライマンが全道の地質、炭田を3年間調査した。そこで、雨竜川上流に炭田があることを確認した。1893年には、道庁や御料の技師らによって1896年頃まで雨竜炭田が調査された。

図3 炭鉱があった位置



出所：鹿島建設株式会社ホームページ「特集鹿島紀行」

図4 石狩沼田駅と恵比島

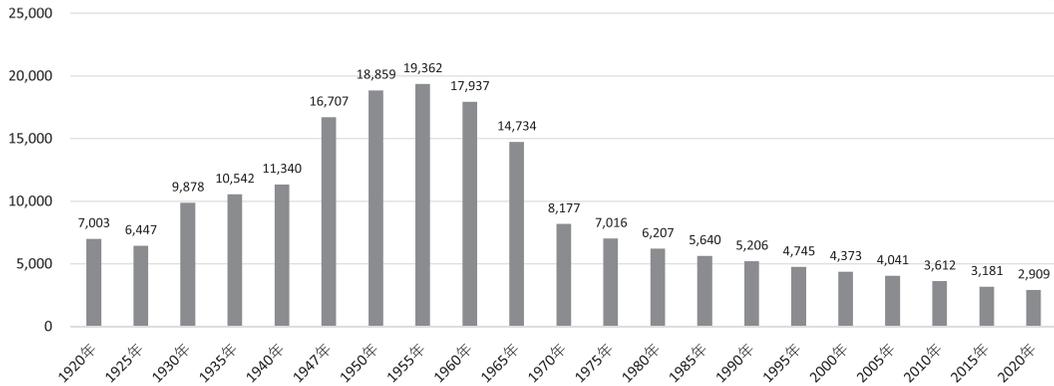


出所：Google Map

1919年、昭和炭鉱の鉱区調査が開始される。1921年に浅野地区で再び鉱床の地質調査・試錐などが開始、1926年には、明治鉱業株式会社が昭和炭鉱の調査を開始するに至る。1928年、浅野、昭和地区で炭鉱調査のため、技術者・労務者が入山し、2年後の1930年には、昭和炭鉱と浅野炭鉱が出炭を開始する。それに伴うかたちで、私鉄留萌鉄道（恵比島～昭和間）が開通した⁶⁾。

図表1 沼田町の人口推移

(単位：人)



出所：国勢調査に基づき筆者作成

表1 年度別・鉱業所別石炭生産量の推移表

(単位：トン)

年度	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	
昭和鉱	13,687	87,563	113,176	105,732	77,106	124,897	140,715	119,799	110,701	97,642	128,838	137,125	135,055	162,531	181,200	68,400	48,400	58,450	80,300	
雨竜鉱		47,395	75,604	90,901	108,687	93,937	100,705	89,110	89,530	136,900	157,700	154,500	152,900	135,320	94,600	45,270	58,700	67,050	94,000	
合計	13,687	134,958	188,780	196,633	185,793	218,834	241,420	208,909	200,231	234,542	286,538	291,625	287,955	297,851	275,800	113,670	107,100	125,500	174,300	
年度	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968
昭和鉱	94,900	111,400	131,600	115,800	133,500	118,250	133,500	153,200	162,100	155,200	122,200	136,400	186,600	202,200	183,800	179,500	193,600	215,700	229,800	181,170
雨竜鉱	104,800	112,000	111,900	116,500	120,300	107,950	117,909	133,430	141,500	148,054	120,490	129,650	139,900	91,613	85,500	99,500	98,400	98,100	101,500	69,200
太刀別鉱															11,320	100,584	151,520	160,516	153,860	100,889
合計	199,700	223,400	243,500	232,300	253,800	226,200	251,409	286,630	303,600	303,254	242,690	266,050	326,500	293,813	280,620	379,584	443,520	474,316	485,160	351,259

出典：沼田町（1970）

1931年には、浅野炭鉱が出炭を開始するが、1941年にガス爆発を起こし27人が死亡、11人が負傷となる事態となった。

1960年になると石油需要が増え、浅野、昭和炭鉱が合理化を図る一方、町議会では、石炭産業振興調査特別委員会が設置され、翌年に産炭地域振興臨時措置法によって地域指定を受ける。1962年には、古河雨竜炭鉱業所が雨竜炭鉱株式会社として新たに発足することとなった。こうした町の動きもあってか、1963年、九州鉱山太刀別炭業所が出炭を開始し、一縷の希望がみえた。

しかしながら、石炭から石油へのエネルギー革命の波には耐えきれず、1968年に雨竜炭鉱が閉山し、翌年の1969年には、昭和炭鉱、九鉱太刀別炭鉱が閉山した。いわゆる「雪崩閉山」である。それに伴い、留萌鉄道（恵比島～昭和間）も営業を停止した。

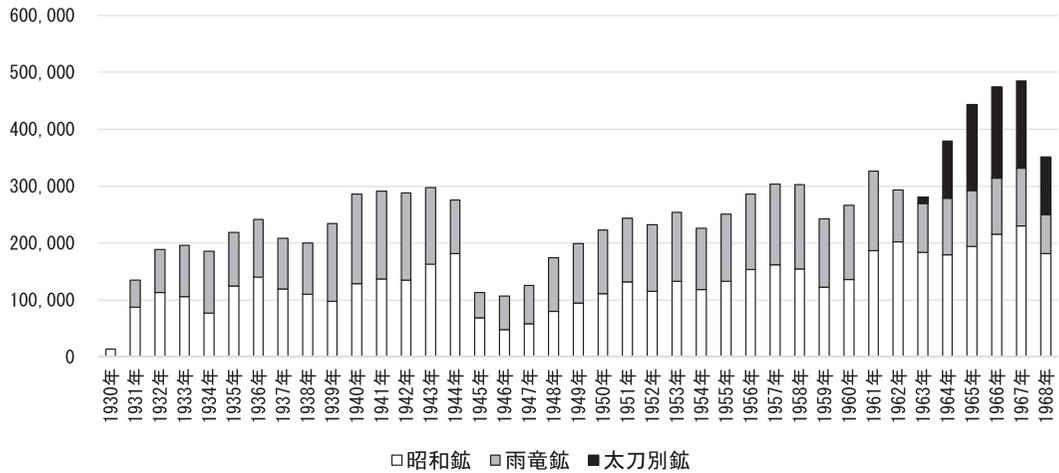
図表1と表1および図表2を合わせてみると、たしかに1940年代後半から1950年代は、石炭生産量に伴い、人口も増加傾向にあり、1955年は19,362人が沼田町に住んでいた。石炭の生産量は、最も多いときで、1961年に326,500トン記録している⁷⁾。その後、炭鉱の閉山とともに人口は、右肩下がりに減少傾向を辿り、2020年時点では小規模自治体となってしまった。

(2) 社会資本整備と地域社会の変容

別の角度から沼田町の地域社会形成を概観すると、現在の沼田市街は、1906年に留萌線着工⁸⁾

図表2 沼田町における年度別・鉱業所別石炭生産量の推移

(単位：トン)



出所：沼田町（1970）に基づき筆者作成

を機に、新築の商店、住宅、木工場などが相次いだことで、本願寺市街（現・北竜第一）より繁栄していった（沼田町1982：788）。小学校（現・沼田神社の位置）の建設、郵便局の本願寺市街からの移転、各商店、旅館が建築され、1910年、沼田市街の戸数は300戸を超えていた（沼田町1982：788）。そこには、沼田喜三郎の尽力もあっただろう。

さらに鉄道関連では、札沼線（札幌～沼田〔現・石狩沼田〕間）について、1927年に建設工事が着工され、1935年10月に札沼線が全線開通となった（沼田町1982：994）。しかし、太平洋戦争の影響や赤字経営が重なり、1972年に石狩沼田～新十津川間が廃止された（沼田町1982：994）。

教育関連では、高等学校について、6・3制整備の見通し、他町村の実態、財政的可能性などが調査検討され、1948年、町議会に高等学校（定時制）の設置を提案し、将来的には全日制課程の設置を目安とすることで可決され、沼田高等学校の創設（1949年）に至ることとなった（沼田町1982：896）。しかし、この北海道沼田高等学校も2010年には閉校となっている。

また、沼田町は、自衛隊を誘致した。自衛隊誘致の動機は、先述した炭鉱業の「雪崩閉山」を発端とする。「雪崩閉山」によって、約15,000の人口が約8,000人に激減した。こうした事態に対応すべく、町は1969年に「炭鉱閉山に伴う沼田町発展計画」を緊急策定し、町議会に諮った。町議会においても「陸上自衛隊沼田駐屯部隊誘致に関する要望決議」を満場一致で決議した。町内では、各種団体会志で構成された「沼田町自衛隊誘致期成会」を設立し、町理事者、町議会、期成会が一丸となり誘致運動を開始し、1986年に弾薬庫の着工により誘致に成功した（沼田町1995：714）。

炭鉱業の衰退（消失）は、地域社会にとって大打撃だった。こうした主要産業の衰退（消失）を背景に、「今後、いかにして地域社会を維持・存続させるか、どう地域社会が生き残ればよいのか」という、いわゆる「まちおこし」の課題認識が、住民意識に立ち現われることは、想像に難くない。

4. 「沼田町夜高あんどん祭り」の創出過程

先に述べたように、「沼田町夜高あんどん祭り」は、沼田町を代表する地域文化である。開催時期は、8月第4週の金曜日、土曜日におこなわれる。あんどん祭りとしては、北海道三大あんどん祭りのひとつに数えられ、道内唯一の「喧嘩あんどん」である。「喧嘩あんどん」といわれる所以は、5トンもなるあんどんを激しくぶつけ合い、あんどん前方に設置された釣物を破壊することにある。

筆者が祭りの当日⁹⁾、現地で視察したところ、旭川市や道東の北見市、道央の札幌市、苫小牧市、室蘭市など、北海道内各地から観光客が自家用車などで訪れていた。その人数も例年、沼田町における人口の約10倍以上にのぼり、2024年度は2日間の開催で、約6万人が来町した(北海道沼田町夜高あんどん祭り公式サイト)。

さて、沼田町にとってかけがえのないこの祭りは、どのように創出されたのだろうか。実は、この祭りは、沼田町という地域社会の伝統文化ではない。そこには、2章で確認した入植の歴史的背景がある。つまり、沼田喜三郎の出身地である富山県の津沢町¹⁰⁾の祭りが伝来したのである。

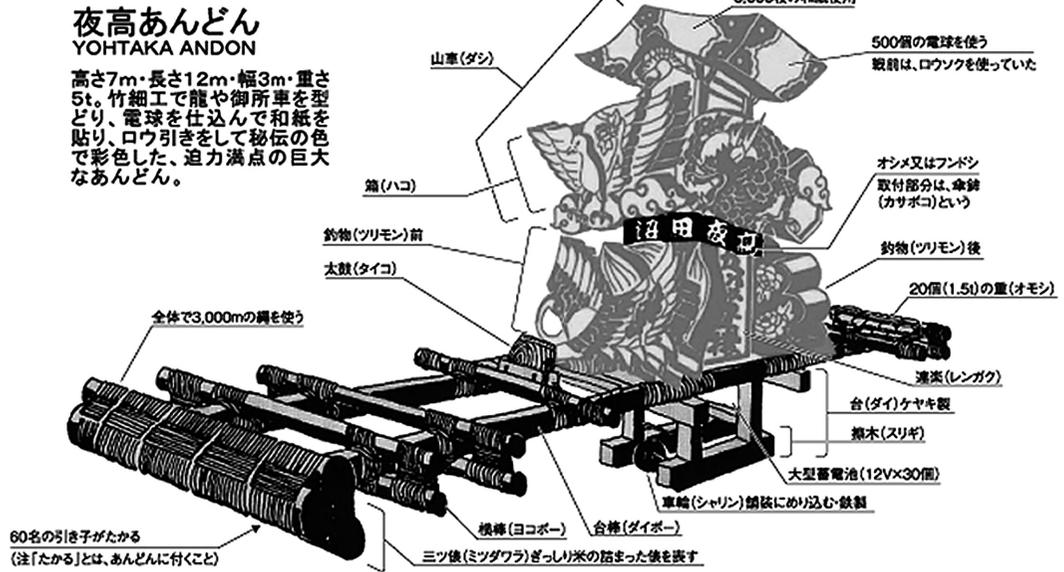
経緯は次の通りである。沼田町開基80周年の1974年に記念式典がおこなわれ、そのとき、沼田喜三郎と縁がある富山県小矢部市の松本正雄市長を招待したことが、小矢部市との親善交流事業のはじまりとなった。1975年には、「小矢部市、沼田町親善交流事業実施要綱」を策定し、その交流事業の一環として、1976年に富山県の伝統芸能「越中清水古流獅子」の獅子舞交歓団が沼田町を訪れた(沼田町1982:443-444)。そこで、指導員の真栗氏は、「吉住さん、津沢には獅子舞よりも、もっと素晴らしい夜高あんどん祭と云うのがあって、それは300年の歴史がある由緒あるすごい祭りですよ。それを分家の沼田でやられたらいいのではないかと、吾々きのうからその話をしていたのです。」と、吉住敏夫氏¹¹⁾(沼田倉庫株式会社代表・当時の沼田町商工会長)に話をした。その頃、沼田町は、まちおこしにしのぎを削っていた時期でもあった。そこで、翌1977年6月、沼田忠氏¹²⁾(株式会社沼田商店代表)を団長、吉住氏が副団長、山森氏、栗中氏、上林氏、商工会から広野伸一理事、佐々木外史雄青年部長、役場から山本七郎総務課長の計8人で、夜高あんどんを見学に行くこととなった(沼田町夜高あんどん保存会ほか2002:1-2)。

見学者たちは、小矢部市の夜高あんどんと出会い、継承を決心した。これが、現在の「沼田町夜高あんどん祭り」のはじまりである。早速、小矢部市より「夜高づくり指導交流団」9人が沼田町を訪れ、あんどん作りを指導した。この年の9月には、小矢部市より、あんどん祭りの「由緒書」が贈られる(原本は沼田神社に所蔵されている)。

そして、9月9日、10日に第1回あんどん祭り(商工会、農協青年部の2基)が町民まつり・秋祭りのなかで披露された(沼田町1982:450)。その後、1978年に、夜高あんどん行事・町民まつり観光協会助成として助成金が予算化され、小学生のあんどん2基が祭りに参加、1982年には、農協青年部・商工青年・農協土地改良区・役場・高等学校・中学校・小学校・幼稚園の8団体があんどんを出した(北海道沼田町夜高あんどん祭り公式サイト)。

また、祭りの本家(小矢部市津沢地区)より贈られた「由緒書」を以下に記す。祭りの由来、歴史性、コンセプトが記載されていることに注目されたい。

図5 祭りで使用される夜高あんどん



出所：北海道沼田町夜高あんどん祭り公式サイト

由緒書

そもそも 夜高行燈は 田祭りの行事として 五穀豊穡 天下泰平 豊年万作を祝い 全町全域を挙げて盛賑をきわめるおめでたい伝承がその由来であるという

伝承によれば 遠く廻り 承應二年(1653年) 砺波郷 福野町の鎮守の氏神として 伊勢神宮より御分霊を勧請した折 この遷宮の御分霊の行列が 加賀 越中の國峠 俱利伽羅峠のあたりにさしかかったころ 日暮れとなつたという

このしらせを飛脚で知った住民が 各々 手に手に あかりのみちしるべの行燈を持ち この行列を全町を挙げて奉迎したのが その起源であると云う

この福野町の夜高行燈をこの地方の津澤町が 六月十日及び 六月十一日の植付けぼんと呼称せられる「やすんごと」の日に 田のまつりの行事として伝承せられたという

ことに 天地に祈り 豊年を祝い かつ 報恩と慰安と虫除けの行事を恒例とする田祭りは ひろく当地方の永い民俗の伝統といわなければならない

晩近 夜高行燈は 年中行事として津澤町の全地全域に相亘り老若男女を問わず 全町民をあげて 盛大に行われ 田ごと 街々に練りあるき その偉観は 名実ともにすぐれ 景勝及び観光等々に資するとともに 小矢部市の風趣として その名は高い

昭和五十二年九月吉日
富山県 小矢部市

(沼田町夜高あんどん保存会ほか 2002：扉絵より抜粋)

5. 結 論 — 分析と考察

ここまで、北海道の地域社会と地域文化の創出過程の関連について整理してきた。これらを踏まえて、分析・考察していきたい。

第一に挙げられることは、北海道の地域社会は、その地域形成が入植・開拓によるものであるため、地域文化も入植者・開拓者の母村に所縁のあるものが再現・伝承され易いことである。しかし、先に述べた福間裕爾(2004)の事例研究のように、母村と所縁のないものが伝承されることもある。社会学者の武田俊輔は、こうした事例を「移植可能な祭り」¹³⁾という。また、「沼田町夜高あんどん祭り」は、神事が希薄であるが、その社会的機能を果たし、かつイベントでもない、という点で、鈴木健太(2024)が提起する「祭礼的なもの」に該当する。まとめると、北海道の地域社会における地域文化は、①母村文化の再現・伝承、②移植可能な祭りとしての再現・実演、という特色がある。

第二には、地域社会における経済の疲弊と関連がある、という点である。本稿の事例で挙げた「沼田町夜高あんどん祭り」は、商工振興を目的として、開拓の祖である沼田喜三郎の出身地の地域文化が伝播された。炭鉱業が衰退(消失)し、次の経済的基盤を模索したとき、まちおこしのキーパーソン(吉住敏夫氏)は、「沼田町夜高あんどん祭り」を起爆剤とする商工振興を仕掛けた。祭りによる地域の活性化、である。

地域社会における産業・経済の歴史を調査し、その上で、なぜ沼田町が夜高あんどん祭りの創出につながったのか。これを説明するには、炭鉱業の衰退(消失)と、それに伴う地域社会の急激な衰退という社会的文脈の経路で、地域社会活性化における機運のひとつとして、夜高あんどん祭りに期待が寄せられた、と考えることが妥当である。そして、それは沼田町住民と沼田喜三郎に所縁のある母村住民の偶発的な出会い、地域住民と域外住民の社会的相互作用、各々が抱く多様な動機、当時の沼田町が抱えていた経済的・社会的課題、分家(沼田町)による本家(小矢部市津沢地区)の祭り継承など、これらが複合的に絡み合い創出されたものである。

おわりに

本稿では、沼田町における夜高あんどん祭りについて、その創出過程を分析・考察してきた。したがって、「沼田町夜高あんどん祭り」の実態調査に関わる前段階の基礎的作業である。ここで明らかにした歴史的事実と仮説的展望にしたがって、「沼田町夜高あんどん祭り」が及ぼす小規模自治体の持続可能性に関する構造分析的研究の実態調査をおこなっていききたい。

注

- 1) 地域文化の概念および社会的機能については、鈴木健太(2024)に詳しい。
- 2) 本稿では、小規模自治体を人口5,000人未満であり、かつ行政サービスの低下、ひいては産業・経済、医療・福祉、教育・文化を軸とする地域社会総体において、住民生活が困難な状況にある自治体という意味で使用している。小規模自治体については、鈴木文彦と中川彩葉の定義がある。前者では、小規模自治体を小都市(人口5万人以上10万人未満の市(人口2万人以上の町村を含む))、町村(人口5,000人以上の町村(人口5万人未満の市を含む))、小町村(人口5,000人未満の町村)と区分している(鈴木2024: 2)。また、後者による定義は、人口3,000人~5,000人を小規模自治体としている(中川2023: 3)。さらに中川は、人口3,000人未満になると自治体単独での行政サービスの維持が困難になるという(中川2023: 3)。これらを踏まえ、北海道の地域社会の特異性を考え定義した。北海道では179市町村のうち、人口5,000人未満の自治体は、45.3%にものぼる。さらに、人口3,000人未満の自治体は、25.7%となっている(2020年度国勢調査)。
- 3) この点については、鈴木健太(2024)で検討されている。

- 4) 北海道三大あんどん祭りとは、沼田町の「沼田夜高あんどん祭り」、八雲町の「八雲山車行列」、斜里町の「しれとこ斜里ねぶた」である。なお、「八雲山車行列」の創出過程に関する研究は、内田和浩(2011)に詳しい。
- 5) 沼田喜三郎は、1834年に富山県西砺波郡津沢町大字新西島で生誕した。12歳で大工の徒弟として奉公したのを機に、紺屋に奉公、農夫、土木作業員などを経験した。25歳のときには、呉服店と質屋を開業し、手織機を発明した。北海道小樽市で精米業に成功しつつ、夕張郡馬追原野を開発し長沼市街の基礎を築く。また製油会社を小樽で設立、深川精米株式会社を設立した。葉煙草の試作にも成功し、北海道に葉煙草専売局の設置を建議した。後に天塩美深に製材工場を創設、北見中頓別に水力製材工場を創設するなど、北海道の産業発展に大きく寄与した(沼田町1995:174-175)。こうした点で、沼田喜三郎は商人であったといえる。
- 6) 沼田町における炭鉱と鉄道、それに伴うまちの形成に関する研究は、濱田武士(2022)に詳しい。
- 7) ただし、太刀別鉱が石炭生産する以前の最高値である。
- 8) なお、沼田駅は1910年に開通した。
- 9) 筆者は、2024年8月24日(土曜日)に「沼田町夜高あんどん祭り」を視察・観察した。
- 10) 富山県津沢町は合併し、現在は小矢部市津沢地区となっている。
- 11) 吉住敏夫氏は、第1回あんどん祭りがおこなわれた1977年に、商工会会長・観光協会会長に就任した(北海道沼田町夜高あんどん祭り公式サイト)。
- 12) 沼田忠氏は、沼田喜三郎の親族(傍系)であり、当時の沼田町では有力者であった。
- 13) 「移植可能な祭り」とは、例えば、その地域性や祭りの構造的特徴を飛び越えて、所縁のない他地域が、青森県のねぶた祭りを「移植」し、再現・実演するといった概念である(なお、この概念は2024年5月11日(土曜日)・地域社会学会第49回大会にて、筆者が武田俊輔氏(法政大学教授)よりアドバイスをいただいた概念である)。

引用文献・URL

- 小内純子, 2019「序章 揺らぐ「農事組合」型農村社会—本書の課題と構成—」柳村俊介, 小内純子編『北海道農村社会のゆくえ 農事組合型農村社会の変容と近未来像』農林統計出版
- 田畑保, 1986『北海道の農村社会』日本経済評論社
- 鈴木文彦, 2024「地方創生10年—人口減に歯止めをかける小規模自治体の所得向上戦略」大和総研
- 中川彩葉, 2023「人口規模を安定的に維持してきた日本の小規模自治体に関する実証研究—日本における地方自治体の持続的発展の在り方に関する考察—」RESEARCH BUREAU 論究(第20号)
- 福岡裕爾, 2004「「ウツス」ということ:北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程」国立歴史民俗博物館研究報告第114集
- 鈴木健太, 2024「地域文化の理論的枠組みに関する一考察 —持続可能な地域社会との関連で—」北海学園大学経済論集第72巻第1号
- 道道資料北海道ホームページ <https://www.dodoshiryo-hokkaido.info/column/hokuryu.htm> (2024年10月21日最終閲覧)
- 総務省統計局, 2022「令和2年国勢調査(総務省統計局) 都道府県・市区町村別の主な結果」総務省
- 沼田町, 1970『沼田町史』沼田町役場
- 沼田町, 1982『新編 沼田町史』沼田町役場
- 沼田町, 1995『沼田町百年史』沼田町役場
- 鹿島建設株式会社「特集鹿島紀行」ホームページ https://www.kajima.co.jp/news/digest/jan_2009/tokushu/toku01.html (2024年10月21日最終閲覧)
- 北海道総合政策部計画局統計課生活統計係, 2022「男女別人口・世帯数(大正9年~令和2年) 一道, 振興局,

市区町村一」北海道

沼田町夜高あんどん保存会, 沼田町, 沼田観光協会, 2002 『夜高あんどん祭り 25 周年記念写真集』 沼田町夜高あんどん保存会, 沼田町, 沼田観光協会

北海道沼田町夜高あんどん祭り公式サイト <https://numata-youtaka.com/> (2024 年 11 月 5 日最終閲覧)

参考文献

鷹田和喜三, 1986 『北海道の村落祭祀研究—母村と移住村の比較研究—』 人間の科学社

宮良高弘, 1993 『北のシリーズ 1 北の生活文化』 第一書房

松平誠, 1990 『都市祝祭の社会学』 有斐閣

竹元秀樹, 2014 『祭りと地方都市—都市コミュニティ論の再興』 新曜社

武田俊輔, 2019 『コモンズとしての都市祭礼 長浜曳山祭の都市社会学』 新曜社

内田和浩, 2011 『「自治体社会教育」の創造 [増補改訂版]』 北樹出版

濱田武士, 2022 「雨竜炭田と留萌港を繋いだ留萌鉄道の開業と沿線のまちの形成」 北海学園大学開発論集第 110 号